

## Japanese mythology in space and time — Himuka part

ISAKA Seishi

Keywords: Japanese mythology, Himuka, Ninigi-no-mikoto, Hayato

### Abstract

In this paper, I examine representative stories of Himuka mythology mainly in the *Kojiki* to place them at intersectional points of space and time, and really to decipher the mythical stories in Himuka.

Ninigi-no-mikoto, the Sun-Goddess Amaterasu's grandson, on her order, descended from Heaven (Takama-no-hara) to the sacred mountain Takachiho in Himuka. Then, he moved to the Ata area in Satsuma, where Hayato tribe has resided; there, he met the beautiful Konohana-no-sakuya-hime (Kamu-atatsu-hime), a daughter of Ooyamatsumi-no-kami (God of mountain). She gave birth to three children in burning birth-room. Elder brother Umisachi-hiko (Hayato tribe) worked as fisherman, whereas younger brother Yamasachi-hiko (Imperial tribe) worked as hunter. While Yamasachi-hiko borrowed a fishing hook from his brother, he lost the hook. He was pressed for returning the hook by his brother, therefore he went into sea for the hook. In the palace of Watatsumi-no-kami (God of sea) he met Toyotama-hime who was a daughter of Watatsumi, and got married with her. Yamasachi-hiko brought back the fishing hook which Watatsumi found, and gave back this to his brother. Thus Yamasachi-hiko revenged himself on Umisachi-hiko. This story shows that Hayato tribe prostrated itself before Imperial tribe.

Thereafter pregnant Toyotama-hime came to Yamasachi-hiko, and in a cave near sea gave birth in shark figure to a boy baby Ugayafukiaezu-no-mikoto. Thus, Ugayafukiaezu-no-mikoto inherited the blood of Watatsumi through Toyotama-hime, and indirectly inherited the blood of Ooyamatsumi through his mother Konohana-no-sakuya-hime. Ugayafukiaezu-no-mikoto was brought up by Tamayori-hime who was younger sis-

ter of Toyotama-hime, and got married with his aunt Tamayori-hime. They had several children, and one of them was called Kamuyamato-iware-hiko, who ascended later the first Emperor Jinmu. By this genealogy of mixed parentage has Imperial tribe gained the divine power of mountain and sea. Therefore Imperial pedigree is not unitary but plural, and the legitimacy of Imperial tribe is supported by such mythical pedigree. Thus Himuka mythology shows that Yamato court was inserting the southern part of Kyusyu (Satsuma and Oosumi), where Hayato tribe has resisted the court, into own territory.

# 日本神話の空間と時間——日向篇

伊坂青司

## はじめに

3

前稿の「日本神話の空間と時間——出雲篇」<sup>(1)</sup>に引き続いて、日本神話の中でも日向を舞台にした「日向神話」<sup>(2)</sup>を主題化することにする。その考察の視点は、空間と時間の座標軸、すなわち地理的空間としての場所と物語の時間系列の交点から日向神話を解読することである。その際に素材となるのが、主に『古事記』および『日本書紀』の神代神話である。神話はかならずしも史実であるわけではないが、しかしまったくのフィクションというわけでもなく、そこには何らかの史実に基づいた伝承が投影されている。ただし、地名で示された地理的空間にしても、物語の時間系列にしても、神話の中では転位されることがあるという、神話構成上の操作には注意を払わなければならない。そこで記紀神話を素材としつつも、考古学や歴史学の成果によって、物語解読の客観性を担保することが必要となる。

日向神話の主題に入るに先立って、まずは記紀神話において、天つ神の系譜からなる日向神話の前になぜ国つ神の系譜からなる出雲神話が配されているのかという、神代神話の配列順序の問題について、前稿を参照しつつ考察しておきたい。

出雲国は、九州北部から比較的早く水田稲作が伝わって出雲族が国造りを進めており、また鉄器製造の先進地<sup>(5)</sup>として、ヤマト王権にとつては版図に組み込みたい地域であった。そこで『古事記』にあるように、葦原中国に出雲国が完成したところで、高天原の主神である天照大神が、その葦原中国を統治するのは自らの長男である天忍穗耳命<sup>あめのむすみこと</sup>だと強弁することになる。その葦原中国が「豊葦原の水穗国」<sup>とよあしはらのみずほのくに</sup>（記二九三頁）と言ひ替えられているのは、出雲国が水田稲作の豊かな国として認識されていたからに他ならない。そこで天照大神は、天忍穗耳命を葦原中国に天降りさせようとするが、この長男は葦原中国が「たいそうざわめいている」（記二九三頁）と腰が引けて、葦原中国に降ることなく途中で戻ってきてしまう。天照大神は取り巻きの神々と相談して、次男である天菩比神<sup>あめのかみ</sup>を葦原中国に派遣するが、大国主神に媚びてそこに居着いてしまうという始末である。

前稿で見たように、最終的には建御雷神<sup>たけみかづちのかみ</sup>が派遣され、大国主神と二人の息子の承諾も得て出雲国を譲られるという形で決着を見ることになる。国譲りの条件は、大国主神が宮殿を造ってもらって、そこに鎮まることであつた。こうして、出雲国の祭祀権については大国主神に帰属したままで、天照大神は出雲国の統治権を獲得したことになる。この物語は歴史的に見れば、大和朝廷が伊勢神宮とは異なる出雲大社の独立性を認めるとともに、律令制によって出雲国を令制国として組み入れたことを意味している。

こうして、出雲神話から日向神話へという記紀神話の配置順序には、地上の葦原中国には日向国に先立って強

大な出雲国がすでに存在していたという、大和朝廷における歴史認識が背景にあったと言えよう。それはすなわち、出雲国は大国主神によって国造りが完成した先進国であったのに対して、日向はその後になってようやく天孫族の活動舞台となる後進の地であったという認識である。このような認識は、日向国の成り立ちについての「国生み」神話にも示されていた。『古事記』によれば、伊邪那岐命と伊邪那美命が交わって生んだ筑紫島（九州）には四つの顔があり、それぞれ筑紫国・豊国・肥国・熊曾国という。ここにはまだ「日向国」の名はなく、それにおおよそ対応するのが「熊曾国」である。すなわち、生まれたばかりの筑紫島にまだ日向国はなく、筑紫島の南部一帯が「熊曾国」と名付けられたわけである。後に大和朝廷によって令制国「日向国」とされる前に、九州南部の大和朝廷に服さない広い地域が「熊曾国」と呼ばれていたという、歴史的経緯がここには示されている。「熊曾」の「熊」は、後に肥後国の南部で「球磨」と表記されることになる地域に対応し、「曾」はその南東に位置する大隅半島の「贈於」<sup>(8)</sup>に対応して、その二つの地域を両極にして広がる九州南部の、いまだ令制国として区分されない茫漠とした地域が「熊曾国」と名付けられたわけである。その「熊曾」の名は『日本書紀』では「熊襲」<sup>(9)</sup>と表記され、そのおどろおどろしい名前とあいまって、その地に住む先住民の抵抗勢力の大きさを示している。<sup>(10)</sup>

熊曾国はもともと形成期のヤマト王権の勢力が及ばない、版図外の異境の地であった。歴史的に見ても九州南部の薩摩と大隅は、土着の「隼人」<sup>(11)</sup>族が大和朝廷の律令制導入に抵抗して、陸奥の蝦夷<sup>(12)</sup>の地とともに令制国設置のもっとも遅れた地域であった。こうして、北海道を除く列島全体に版図を拡大しようとする大和朝廷にとつて、隼人の抵抗が続く九州南部の地域は統治戦略の最前線をなしていた。こうして出雲神話に続く日向神話には、

そのような九州南部についての<sup>12</sup>大和朝廷の現状認識と現在の課題が投影されているのである。

こうして出雲神話に続いて、次なる葦原中国である日向が神話物語の舞台になる。以下では、「筑紫の日向」の高千穂峰に天孫の邇邇芸命が降臨して、主に山を舞台に展開される物語を考察し（一）、そして邇邇芸命から始まる天孫族三代の、主に九州南部の海と沿岸域を舞台に展開される物語を考察する（二）ことにしよう。

## 一 山を舞台にした日向神話の物語

### 邇邇芸命の高千穂峰降臨

九州南部の日向を舞台に展開される「日向神話」について、主に『古事記』に即して見てゆくことにしよう。その日向神話は、高天原から葦原中国の高千穂峰に天照大神の孫である邇邇芸命が降臨するいわゆる天孫降臨の物語から始まって、さらに天孫族が日向の地を舞台に繰り広げる物語として展開されることになる。

天照大神と高木神は、出雲国すなわち「葦原中国を完全に平定し終わった」（記三〇一頁）との報告を建御雷神から受け、天照大神は長男である天忍穗耳命に、「葦原中国に降って統治しなさい」（同前）と委任することになる。ところが委任された天忍穗耳命は、かつて出雲へ降ることに躊躇したように、ここでも言い訳をして自ら降ろうとしない。その言い訳とは、「自分が天降りしようとして装束を整えている間に子が生まれました」（同前）という荒唐無稽なもので、その子を自分の代わりに天降りさせたいという。その子とは天忍穗耳命と高木神の娘との間の子で、天津日子番能邇邇芸命と名付けられた。その名前は天つ神で天照大神の孫というにふさわし

い。そこで天照大神はその申し出に従って、葦原中国の「豊葦原の水穂国」<sup>とよあはらのみづほのくに</sup>を統治するよう、自らの孫である邇邇芸命を天降らせることになった。ここで葦原中国が「豊葦原の水穂国」とされているのは、『古事記』の中では出雲国に次いで二度目で、その後にこの表現が使われることはない。このように「豊葦原の水穂国」と表現されている葦原中国は、その名称から推測されるように水田稲作の豊かな地であることがイメージされている。

邇邇芸命の天降り先の地理的空間は、地上の葦原中国の中でも「筑紫の日向」であることが間もなく明らかになる。神話物語の舞台は、山陰の出雲国から一気に九州の日向に空間移動することになるのである。天上の高天原からすると、地上の出雲から遠方の日向へと天降り先を移動することなど何の苦もないことであろう。なぜなら高天原は、地上空間に拘束されることなく、神々が必要に応じて目当ての地上へと降下することのできる自由な神話空間として設定されているからである。

それにしても、なぜ邇邇芸命の降臨の地が出雲から、さらに大和から遠く離れた「日向」なのか、まずその地理的空間という視点から考えてみよう。「筑紫の日向」は『古事記』の中で、伊邪那岐命が黄泉国で死に穢れた<sup>けが</sup>恐ろしい伊邪那美命から逃げて辿り着いた地として前に登場していた。その地は天上の高天原ではなく、地上の葦原中国にある。そこは「筑紫の日向」の「橘の小門の阿波岐原」<sup>たちばなのおどあわぎがはら</sup>（記二六六）として特定され、伊邪那岐命が伊邪那美命の死の穢れを祓うために禊をした場所とされている。<sup>15</sup>伊邪那岐命は身に着けていた穢れた物を捨てて瀬の水で身を濯ぎ、そこにさまざまな神々が生まれる。ここでは、死の穢れを祓うのに水が重要な役割を果たし、神々が成ることに水が介在している。そして禊の最後に、伊邪那岐命は自らの左目を水で洗って天照大神が、右目を洗って月読命が、鼻を洗って須佐之男命が生まれたという。ここで注目すべきなのは、もともと天照大神

も地上の日向の阿波岐原で誕生したということである。その天照大神は、父である伊邪那岐命によって天上の高天原を治めるように委任され、地上から高天原へと昇つてその主神となる。そして天照大神は高天原の主神として、自らの孫を地上に降臨させ、葦原中国を統治することになるのである。

ところで「日向」は、その名のとおりの太陽に向かう地として、太陽の神である天照大神の生まれ故郷にふさわしい。そしてその日向は「豊葦原の水穂国」として、天照大神が高天原から邇邇芸命を降臨させる地になるのである。天照大神がその水穂国にとりわけ目を付けたのは、高天原で自ら水田稲作を営む神としての性格<sup>(16)</sup>があつたからである。しかもその降臨の地が天照大神の生まれ故郷であつたとすれば、なおさらのことである。

さて、邇邇芸命が高天原から「豊葦原の水穂国」に天降りしようとしたところ、高天原からの分岐点に「上は高天原を照らし、下は葦原中国を照らす神」(記三〇一頁)がいた。そこで天宇受売命<sup>あめのうすめのみこと</sup><sup>(17)</sup>が遣わされて「誰か」と尋ねたところ、国つ神の猿田毘古神<sup>さるたひこのかみ</sup>と名乗り、天孫の天降りの先導役として迎えに来たという。この神が先導した先こそ、「筑紫の日向の高千穂の聖なる峰」(記三〇三頁)であつた。<sup>(18)</sup>ここに天孫降臨の地が日向の高千穂峰であることが明らかにされた。天照大神が邇邇芸命の天降り先として指定した「豊葦原の水穂国」の中でも、邇邇芸命を日向の高千穂峰へ導いたのは猿田毘古神ということになる。それでは猿田毘古神の正体は、何者なのであろうか。そこには猿田毘古神と天照大神との関係が示されているのである。

この猿田毘古神は、自らの帰るべきところを「伊勢の狭長田<sup>さながた</sup>の五十鈴<sup>いすず</sup>の川上」(紀上六四頁)とされていることから、伊勢の五十鈴川上流域の土着の神ということになる。その伊勢の地とは、後に倭姫命<sup>やまひめのみこと</sup><sup>(19)</sup>が大和から天照大神の鎮座する地を求めて辿り着き、天照大神が「伊勢国はしきりに浪の打ち寄せる傍国<sup>かたくに</sup>の美しい国」(紀上一



四三頁）として、気に入って降臨することになる当の地である。そして倭姫命は、天照大神の言葉のままに大神の「祠を伊勢国に立て」、そして自ら斎王としてこもる「斎宮を五十鈴川のほとりに立てた」とされる（紀上一四四頁）。こうしてみると、天照大神を祀る神宮が創祀されるのに先立って、猿田毘古神はその伊勢の地を土着の神として支配していたことになる。<sup>(20)</sup> そうしてみると、天孫降臨の場面での猿田毘古神の登場は、後に天照大神が伊勢国に降臨する伏線になっていると考えることができる。

邇邇芸命を高千穂峰へと先導する役目を終えた猿田毘古神は、邇邇芸命の指示で天宇受売命に伊勢の地まで送ってもらい、その縁によって天宇受売命は猿田毘古神の名を継いで猿女君を名乗ることになったという（記三〇四頁）。ここには、大和朝廷で祭祀を司る巫女集団である猿女君と伊勢国の猿田毘古神との因縁が示されている。

ところで邇邇芸命が天降るにあたって、天照大神は五人の伴緒を随伴させたとされている。その中でも天児屋命、布刀玉命、天宇受売命は、天の岩屋に隠れた天照大神を誘い出す場面で、次のような重要な役割を果たしていた。布刀玉命は制作された勾玉の連珠と八咫鏡を枝につるした榊の木を捧げ持ち、天児屋命は祝詞を唱える。そして天宇受売命は乳房をあらわにして裳の紐を陰部まで垂らし、その神憑りしたようなエロティックな踊りで集まった神々がどっと大笑いする。不思議に思った天照大神が岩屋の戸を少し開けて顔を出したところで、天児屋命と布刀玉命が八咫鏡を差し出す。そして、その鏡に映った自分の顔に誘われて岩屋から出てきたところで、手力男神が天照大神の手をとって引つ張り出したという（記二七三―四頁）。こうした天照大神再出現の一連の物語は高天原でのことであるから、ここに登場するこれらの命や神は天つ神の系列に属する者として位置づけら

れていることになる。その天児屋命は大和朝廷の祭祀を司る中心氏族である中臣（藤原）氏の祖神とされ、また布刀玉命は同じく祭祀を司る忌部氏いんべの祖神とされる。さらに天宇受売命は忌部氏の系譜に繋がり、巫女の猿女君の祖神とされる。こうしてみると、大和朝廷で祭祀を司っていた有力氏族や巫女の祖神が、天照大神の再出現の場面に続いてここでも天孫降臨の随伴者とされていることは、大和朝廷におけるそれら一族の存在の大きさを顕示するものである。

さて邇邇芸命が天降るにあたって、天照大神は「八坂瓊曲玉やさかにまがたま及び八咫鏡、草薙劍くさなぎのつるぎの三種の神器」（紀上六二頁）を邇邇芸命に持たせたとされる。これらがいわゆる「三種の神器」<sup>(24)</sup>として現在に至るまで天皇に継承されてきたのは、この場面での神話物語に基づいている。天照大神は八咫鏡について「この鏡は唯一私の御魂みたまとして、私を拝むように祀りなさい」（記三〇二頁）と告げていることから、この鏡には他の二種の神器以上に、天照大神自身によって特別な意味が付与されている。それは、弥生時代の稲作にとって太陽が重要な意味を持ち、銅鏡が太陽を象徴するものとして見られていたことを示すものである。天照大神のこの言葉を受けて、邇邇芸命は「伊須受能宮すのみや」（記七六頁）すなわち五十鈴川のほとり建つ「伊勢の皇大神宮」を拝み祭った（記三〇二頁）とされている。しかし『古事記』の垂仁朝の記述に倭比売命が天照大神の「伊勢の大神宮を祀った」（記三四二頁）とあるのだから、伊勢神宮の創建は先の話である。したがって、この場面での邇邇芸命による皇大神宮遥拝の物語は、時間を先取りした神話的フィクションということになる。

いよいよ邇邇芸命一行は猿田毘古神に先導され、高天原から「雲を押し分けて」、「筑紫つくしの日向ひむかの高千穂たかちほの聖なる峰」（記三〇三頁）に天降る。<sup>(25)</sup>邇邇芸命が降臨した空間的地点がようやくここに明示されたことになる。それ

にしても天孫降臨の地が、後にヤマト王権形成の地となる大和の三輪山ではなく、なぜ大和から遠く離れた日向の高千穂峰でなければならなかったのか。確かに、邇邇芸命が日向の高千穂峰に降臨したという物語は、祖母である天照大神が日向の阿波岐原で誕生したという神話物語と連動しているであろう。阿波岐原からそう遠くはない高千穂峰は、天孫がその霊峰に降臨するという物語に相応しかったといえよう。しかし、高千穂峰が天照大神の生まれ故郷に近いというだけでは根拠に乏しい。高千穂峰が木も生えない火山で「豊葦原の水穂国」のイメージから程遠いとなれば、なおさらのことである。そのような高千穂峰がなぜ「豊葦原の水穂国」とされたのか、その秘密を解く鍵は、高千穂峰を西に望む日向の阿波岐原周辺の空間にありそうである。そこでわれわれは、この日向の地理的空間と歴史に目を向けることにしよう。

天照大神の生まれ故郷とされる日向の阿波岐原周辺（現・宮崎平野）は、一ツ瀬川や大淀川などの河川の水に恵まれた沖積平野で、火山灰によるシラス台地の多い九州南部の中では水田稲作に適した地である。<sup>(26)</sup> 宮崎平野中部を流れる一ツ瀬川中流域の高台に点在する西都原古墳群<sup>(27)</sup>は、男狭穂塚・女狭穂塚古墳など大型の前方後円墳三一基を含む三一九基からなる国内最大規模の古墳群で、ヤマト王権とつながった日向の在地豪族の中心地をなしていたと考えられる。男狭穂塚古墳の培塚とされる西都原一七〇号墳から舟形埴輪が発掘されていて、その形状から想像される大型の手漕ぎ船は、日向の地から日向灘を経由して大和や朝鮮半島へとつながっていたであろう海上交通路を裏付けるものである。また宮崎平野南部を流れる大淀川流域には、櫛遺跡<sup>(28)</sup>に前方後円墳を含む櫛古墳群<sup>(28)</sup>があることから、この地域でも水田稲作を背景に、弥生時代から古墳時代にかけて在地豪族が形成されてきたと考えられる。

そうした稲作文化によって、すでに弥生時代には宮崎平野の広域にいくつかの集落が形成され、そのまとまりとしての国は、『魏志』倭人伝の中に記述された倭国の「つまじく馬国」<sup>(29)</sup>に比定することができる。一ツ瀬川や大淀川の水に恵まれたこの地域は、水田稲作の豊かな地として大和朝廷にとって特別な意味を持っていたであろう。しかも天孫降臨の霊峰とされる高千穂峰は、その東山麓から流れる大淀川流域から西に遠望することのできる位置に聳えている。こうした日向の地に、天照大神によって「豊葦原の水穂国」というこの名称が与えられ、邇邇芸命の天孫降臨神話が構成されたと考えることができるのである。<sup>(30)</sup>

古墳時代のヤマト王権にとって日向が重要な地域であったことは、宮崎平野に築造された古墳群に多くの前方後円墳が含まれていることから分かる。前述の西都原古墳群や檣古墳群以外でも、大淀川流域の台地上に築造された生目古墳群<sup>(いきめ)</sup>は、前方後円墳七基を含む古墳時代初期からの大規模な古墳群で、一号墓は箸墓古墳の二分の一の相似形でヤマト王権とのつながりを示している。こうした宮崎平野に築造された前方後円墳群は、在地豪族の諸君一族<sup>もろふたのみみ</sup>がこの地域全体の中心勢力をなし、五世紀初めには大和朝廷との同盟によってその地位が保証されていたことを物語っている。<sup>(31)</sup> また大和朝廷からすれば、こうした日向の地は薩摩半島と大隅半島に対する統治の前線拠点として重要な意味を持ち、日向神話を構成する空間的背景をなしていたのである。

ところで高千穂峰は、その山頂に降り立った邇邇芸命によって、「からのに韓国に向き合い」、「かささしのみ笠沙岬」に通じ、「朝日がまっすぐに射す国」、「夕日の照り輝く国」として、空間的に「もつともよい地」とされている（記三〇三頁）。すなわち、北方には朝鮮半島の韓国が遠くに位置し、また南方には薩摩半島の笠沙岬へと通じる位置にある。その笠沙岬は、これから展開される日向神話の一つの舞台になる。東から昇る「朝日がまっすぐに射す国」という

表現には、遮られることなく日に向かうという「日向国」の意味が込められている。

しかしそのような高千穂峰の山頂からの眺望とは裏腹に、高千穂峰は実際には木も生えない火山であり、「豊葦原の水穂国」とは程遠い水田稲作にはまったく適さない地なのである。<sup>(32)</sup>『古事記』では、邇邇芸命は高千穂峰の大地に柱を太く立て、千木<sup>ちぎ</sup>を高く上げた「宮殿」に住んだとされる（記三〇三頁）。しかし噴火を繰り返してきた高千穂峰に、その痕跡を確認することはできない。それにもかかわらず高千穂峰は、日向国の南端に聳える美しい神奈備山として山岳信仰の対象であつたし、また後述するように、大隅半島の曾於地域に接する前線拠点として、天孫降臨神話を構成する象徴的な霊峰だったのである。

### 邇邇芸命と木花之佐久夜毘売の物語

ところで邇邇芸命は高千穂峰から南に向かい、物語の舞台は「笠沙岬」に転じることになる。この笠沙岬は、薩摩半島から外洋に突き出した野間半島の野間岬（鹿児島県南さつま市笠沙町）に比定され、その野間半島には現在も「笠沙」の地名が遺っている。野間岬からせりあがつて眼下に外洋を望む野間岳<sup>(33)</sup>には磐座<sup>いわくら</sup>の遺跡があつて、先住民の痕跡を留めている。薩摩半島のこの野間半島から南西部はもともと「阿多<sup>あた</sup>」と呼ばれる隼人の地で、この地においてその後の邇邇芸命の物語が展開されることになる。

高千穂峰から下つて来た邇邇芸命は、この笠沙岬で容姿端麗な一人の乙女と出会い、素性を問うたところ「大<sup>おお</sup>山津見神の娘で、名は神阿多都比売<sup>かみあたつひめ</sup>、別名木花之佐久夜毘売<sup>こはなのさくやひめ</sup>」<sup>(34)</sup>（記三〇四頁）だと名乗った。そこで邇邇芸命は早速に求婚したところ、父親の許しが必要だというので使者を立てたところ、大山津見神は喜んで結婚を承諾し

たという。ここで注目すべきは、木花之佐久夜毘売が自らの本名を「神阿多都比売」として、「阿多」の出であることを明かしていることである。すなわち木花之佐久夜毘売は自らが阿多隼人族の娘であることを告白したことになる。邇邇芸命が神阿多都比売とこの地で出会って結婚したとされる物語は、大和朝廷と阿多隼人との関係を示すものである。阿多地域は、邇邇芸命が目指したはずの「豊葦原の水穂国」とは違って水田稲作に適した土地もなく、日向国と違って在地の豪族が形成されることもなかった。そのことは、この地域に前方後円墳が見られないことから分かる。むしろ阿多地域では縄文系の土着の先住民が独自の勢力と文化を保持しており、大和朝廷はその先住民を取り込んで「阿多（薩摩）隼人」<sup>(35)</sup>と名付けたのである。

邇邇芸命と神阿多都比売との結婚という神話物語には、そのような歴史的背景がある。『続日本紀』<sup>(36)</sup>では、大和朝廷に対する薩摩隼人の抵抗はあったものの、八世紀初めには平定されたと伝えられている。そして薩摩の地は、その後<sup>(37)</sup>に令制国に組み込まれて「薩摩国」の一部となる。この地を薩摩国に組み込んだ大和朝廷は、記紀編纂において邇邇芸命と神阿多都比売の神話物語を仕立て上げたのである。

ところで、天つ神の邇邇芸命と娘との結婚を喜んだ父親の大山津見神は、結納の品々を献上するとともに、木花之佐久夜毘売の姉である石長比売<sup>いわながひめ</sup>を、子孫の寿命が長くなるようにと差し出してきた。しかし邇邇芸命は醜い石長比売を送り返し、桜の花のように美しい木花之佐久夜毘売<sup>(38)</sup>を選択したために、その後の天皇の寿命は短かくなったという。手元に残した木花之佐久夜毘売と一夜の契りを交わし、その後、木花之佐久夜毘売が再びやって来た時、すでに身ごもって「今にも出産の時になっております」（記三〇六頁）と告げる。しかし邇邇芸命は、その子はたして一夜の契りだけで身ごもった我が子なのかを疑った。そこで木花之佐久夜毘売は、その疑念を

晴らすために「天つ神の御子であれば無事に生まれるでしょう」（記三〇六頁）と、自ら作った産屋に入って火を放ち、火中で無事に出産した。こうしてみると木花之佐久夜毘売は、桜の花のように美しいだけではなく、燃えさかる火のような激しさも秘めている。その木花之佐久夜毘売が、薩摩半島の阿多から東に望む錦江湾（鹿児島湾）の火山の島、すなわち桜島<sup>(39)</sup>に祀られたのも不思議ではない。さらにこの火山の女神は、後に富士山本宮浅間大社<sup>(40)</sup>をはじめ、火山にまつわる全国の浅間神社の祭神として祀られることになるのである。

木花之佐久夜毘売は火中で三人の子を無事に生んだことで、邇邇芸命の疑念を晴らすことができ、三人の男子は、順に火照命<sup>はでのみこと</sup>、火須勢理命<sup>はすせりのみこと</sup>、火遠理命<sup>はりのみこと</sup>と名付けられた。長男の火照命は「隼人の阿多君の祖先」（記三〇六頁）とされており、ここに天孫族とは系譜を異にする阿多隼人の祖であることが明かされている。記紀編纂の前にはすでに阿多地域は令制国の薩摩国に組み込まれ、阿多隼人も平定されて朝廷に仕えるようになっていた。<sup>(41)</sup>そのことから、阿多隼人の祖とされる火照命も、天孫族と同じ血縁の兄弟として扱われているわけである。このように阿多隼人を朝廷への服従をもって天孫族の血筋に組み込む神話的操作は、大和朝廷への出雲族の服従をもつて、須佐之男命を天照大神の弟として血族関係に組み込んだことにも見られる。

長男の火照命に対して三男の火遠理命は、天津日高日子穗々手見命<sup>あまつひこひこほでみのみこと</sup>という別名（記三〇六頁）で、天つ神の血筋を引く邇邇芸命直系の天孫族とされている。ただしここで注目しておきたいのは、天孫族の火遠理命とはいえず、木花之佐久夜毘売の父親である大山津見神の血筋を引くことによって、天孫族が山の神の霊的な力を取り込んだという神話的構成がなされていることである。しかも火遠理命が神阿多都比売の子であることによって、その後の天皇族には阿多隼人の血筋が受け継がれることになったということでもある。



邇邇芸命と木花之佐久夜毘売にまつわる物語の舞台となった薩摩半島は、『古事記』が完成する一〇年前の七〇二年には九州南部の広域に設置された日向国から分立し、令制国の薩摩国として大和朝廷にとって新たな版図になっていた。しかし他方で、桜島を挟んで薩摩半島の対岸に位置する大隅半島（現在の鹿児島県東部）の中でも、中部の贈於と呼ばれた地域では先住民の大隅隼人が勢力を持ち、その一部が大和朝廷に対する反乱を繰り返していた。班田収授制<sup>(42)</sup>を導入しようとする大和朝廷の律令制に対して、土地の共有を伝統とする隼人の一部が抵抗していたのである。その贈於地域を含む大隅半島一帯が、七一二年には広域の日向国から令制国の大隅国として分立する。しかし贈於地域は、『日本書紀』が完成した七二〇年にも大隅国守の殺害に端を発した隼人の反乱が起こり、征隼人持節大將軍に任命された大伴旅人<sup>(43)</sup>によってようやく鎮圧されるという不安定な状態にあった。日向国に隣接する贈於とその周辺海域は、九州南部全域を統治下に収めようとする大和朝廷にとって、緊張関係を孕んだ地域だったのである。

## 二 海を舞台にした日向神話の物語

### 火遠理命と火照命の物語

邇邇芸命と木花之佐久夜毘売の子として山の神の血筋を引く天孫族の火遠理命の物語は、次に海とその沿岸地域を舞台に展開してゆくことになる。その海がどこであるのか、地理的に特定されてはいないものの、これまでの物語の流れから九州南部の海であることはまちがいない。九州南部一帯は、海と山の入り組んだ地形空間をな



している。とりわけ海とその沿岸地域に注目してみると、薩摩半島と大隅半島に挟まれた錦江湾（鹿児島湾）は、海底噴火による始良カルデラが桜島から湾奥部にまで深い内海を形成している。そして大隅半島の東側には、日向灘から志布志湾へとつながる沿岸域が続いている。その錦江湾と志布志湾に挟まれた大隅半島一帯は、もう一つの隼人族である「大隅隼人」<sup>(44)</sup>と名付けられた縄文系の先住民が独自の勢力として、その一部が大和朝廷に抵抗していた。そしてその大隅半島の曾於地域は、版図を拡大しようとする大和朝廷と隼人族との間に緊張状態を生み出していた。こうした地域を舞台に展開されることになる神話物語は、天孫族の火遠理命すなわち山佐知毘古<sup>やまさちひこ</sup>と、隼人族の火照命すなわち海佐知毘古<sup>うみさちひこ</sup>との兄弟間の確執をテーマにしているのである。

山で狩猟を生業にしている弟の火遠理命は、海で漁労を生業にしている兄の火照命の釣針が欲しくなり、兄に道具の交換を提案して、ようやく釣針を手に入れることができた。しかし火遠理命は釣りをしていたところ、兄が大切にしていたその釣針を海中になくしてしまう。兄から釣針の返還を執拗に求められ、責め立てられて困り果てているところに塩椎神<sup>しおつちのかみ</sup>が現れて、火遠理命は海の神である綿津見神<sup>わたつみのかみ</sup>のもとへと籠の小舟で送り出された。

着いたところは、魚の鱗のように並び建つ綿津見神の壮麗な宮殿であった。火遠理命は塩椎神に教えられたように井戸のほとりの木の上で待っていたところ、侍女の手引きで綿津見神の娘の豊玉毘売<sup>とよたまひめ</sup>が現れ、端整で高貴な姿の火遠理命を見初めることになる。そして父親の綿津見神も、火遠理命を天つ神の血筋であることから歓待し、娘と結婚させたという。こうして火遠理命は綿津見神の宮殿の人となった。

火遠理命はこの海の宮殿で夢のような生活を送り、三年経ったところでここに來た目的を思い出した。深い溜息をつく訳を問う綿津見神に事の仔細を語ったところ、鯛の喉に刺さっている釣針を見つけてくれた。こうして

火遠理命は、綿津見神から釣針を返す時の呪文と二つの玉を与えられ、釣針を手に「ひとひろ尋ワニ<sup>(47)</sup>（サメ）に乗って戻ることができたという。

火遠理命が綿津見神の宮殿から帰還して宮を創建したという由来を伝えるのが、日向灘に浮かぶ青島に建つ青島神社である。その青島神社は、火遠理命とその妻の豊玉毘売を祭神として祀っている。その創建時期は不明であるが、この青島は、阿波岐原から日向灘を南下して大隅半島南部の志布志湾に至る海上ルート上に位置し、大和朝廷にとっては、日向国から大隅半島へと統治圏を拡大するための重要な海の前線拠点という意味を有していたであろう。

話を元に戻して、火遠理命は釣針を兄に返す時に、綿津見神から教えられたように呪文を唱えて後ろ手で渡した。そうすると、その予言どおり火照命は三年の間に貧しくなった。それを恨んだ火照命が戦いを仕掛けてきたので、火遠理命は綿津見神からもらった「潮の満ちる玉」（記三一〇頁）で溺れさせ、今度は憐れみを乞うてきた火照命を「潮の干る玉」（同）で助けてやった。このように苦しめられた火照命は額を土にこすりつけて、「私は今から後は、あなたを昼も夜も守る者となってお仕えます」（記三一頁）と言って、火遠理命に服従することになったという。それで「火照命の子孫の隼人」（同前）は、溺れるような仕草を含む演技<sup>(48)</sup>で朝廷に仕えているとされるのである。この兄弟の物語は、記紀編纂によって、また大和朝廷に仕える隼人によって、朝廷内の人々の間でもよく知られるようになっていたであろう。

このように火照命が火遠理命に仕えるようになったという兄弟の物語から、次のような構図が見えてくる。それは、邇邇芸命の直系血族である天孫族の火遠理命が、隼人の祖である火照命を支配するようになったという、

天孫族による隼人族の支配・従属関係である。そのことが歴史的に意味しているのは、大和朝廷が九州南部の大隅半島で抵抗を続ける大隅隼人の一部を抑え込み、朝廷内の隼人司に取り込んだことである。<sup>(49)</sup>さらにこれに続く九州南部の沿岸地域を舞台にした日向物語では、天孫族の火遠理命が綿津見神の娘である豊玉毘売との間に子をもうけることによって、天孫族に海の靈力が取り込まれることになるのである。

### 鵜葺草葺不合命から神倭伊波礼毘古命へ

さて、火遠理命が綿津見神の宮殿を去った後、豊玉毘売は火遠理命を追いかけて来た。というのも、豊玉毘売はその時すでに妊娠していたからである。火遠理命の許で出産しようとしたのも、「天つ神のご子孫は海の中でお生まれになってはなりません」（記三一 一頁）という豊玉毘売の強い思いゆえである。豊玉毘売は出産間近になって、海辺の渚に鵜の羽根で葺いた産屋を大急ぎで造ったが、葺き終わらないうちに出産が切迫した。そこで豊玉毘売は、火遠理命に「本来の姿になって産みます。どうか私をご覧にならないでください」（記三二 二頁）と告げて産屋に入る。その言葉を不審に思った火遠理命が産屋の中を密かに覗いてみると、豊玉毘売が「大きなワニ（和邇）になって、くねくねと這って」（同前）出産している。その姿を見て火遠理命は驚き、恐ろしくなつて逃げ出した。そして、自分の姿を見られた豊玉毘売は恥ずかしく思い、産んだばかりの子を置いて海の国に帰ってしまったという。その子の名前は鵜の羽根で産屋を葺き終わらないうちに生まれたことから、鵜葺草葺<sup>うがやふき</sup>不合命<sup>あふすのみこと</sup>と名付けられた。こうしてみると鵜葺草葺不合命は、天孫族の火遠理命の子でありながら、綿津見神の血筋である豊玉毘売の、しかもその「本来の姿」であるワニ（サメ）の血を受け継いでいることになる。

その鵜葺草葺不合命を祭神として祀っているのが日向灘に面した鵜戸神宮<sup>(50)</sup>で、その本殿の建つ岩窟内で豊玉毘売は子を産んだと伝えられる。このような神話的伝承を伝える鵜戸神宮は、日向灘に浮かぶ青島をさらに南下して志布志湾へと直接通じる沿岸ルートの前線拠点に位置している。その意味で鵜戸神宮は、大隅半島の海側から内陸部の曾於をにらむ位置にあったといえよう。

ところで海の国に帰ってしまった母親の豊玉毘売に代わって、鵜葺草葺不合命の養育のために遣わされたのが綿津見神の次女、すなわち豊玉毘売の妹の玉依毘売<sup>たまよりひめ</sup>である。豊玉毘売はこの妹に、忘れられない「真珠のような」(同前)火遠理命への想いを歌にして託し、それに応えて火遠理命は、「妻のことを忘れはしない、命のあるかぎり」(記三二三頁)というように、豊玉毘売への想いを歌に託して返した。玉依毘売に育てられた鵜葺草葺不合命は、この叔母と結婚し、産まれた子が五瀬命<sup>いつせのみこと</sup>を長男とする四兄弟で、その末の弟が神倭伊波礼毘古命<sup>かむやまいろれひのみこと</sup>である。この末の弟が後に五瀬命ら兄弟と日向から東方に移動し、大和の畝傍<sup>うねび</sup>の橿原宮で初代天皇として即位し、神武天皇になったとされるのである。

以上のように邇邇芸命から火遠理命(山佐知比古)へ、そして火遠理命から鵜葺草葺不合命へとつながる天孫族の系譜が日向三代とされる。その中でも火遠理命と鵜葺草葺不合命の物語は、九州南部の海とその沿岸を舞台に展開されている。邇邇芸命と木花之佐久夜毘売の子として山の神の血筋を引く天孫族の火遠理命は、続いて海の神である綿津見神の娘の豊玉毘売との間に鵜葺草葺不合命をもうけた。したがってこの鵜葺草葺不合命は、父親の火遠理命から天孫族とともに山の神の血筋を、また母親の豊玉毘売から海の神の血筋を引いていることになり。しかも鵜葺草葺不合命は、豊玉毘売の「本来の姿」をなすワニ(サメ)から産まれたとされていることから、

火遠理命の天孫族の血とともに、半分は海のワニ（サメ）の血を受け継いでいることになる。さらにその鵜葺草葺不合命は、豊玉毘売の妹である玉依毘売との間に神倭伊波礼毘古命をもうけたのであるから、神倭伊波礼毘古命すなわち初代天皇の神武天皇にも、天孫族の血とともにワニの血が混ざっていることになる。このような系譜によって、その後の天皇族は綿津見神の血筋を合わせ持ち、海の靈力を血統のうちに取り込んだことを示していると言えよう。

しかしそれにしてもなぜ、天皇族の系譜に海のワニ（サメ）の血が混じることになったという、驚くべき神話的フィクションが必要だったのだろうか。その秘密を解く鍵は、歴史的に見て九州南部の沿岸域を活動の舞台にしていた古代の海人族<sup>あま</sup>の存在にあると言えよう。日向神話で重要な役割を果たす綿津見神は、海人族が奉斎する祭神であり、全国の綿津見神社はこの海の神を祭神としている<sup>(32)</sup>。また海と沿岸域を舞台にした日向神話にワニ（和邇）が登場することから、海人族の一族である和邇氏のこの海域における役割が暗示されていると考えることができる。この氏族はワニ（サメ）を動物トートেমとし、航海に長けた海洋集団であった<sup>(33)</sup>。「ワニ」という名前を聞けば、大和朝廷内の人々は海の「ワニ（サメ）」とともに、氏族としての「和邇」を思い浮かべたにちがいない。しかもこの和邇氏は大和の地に入って拠点をかまえ<sup>(34)</sup>、天皇族と姻戚関係によって血縁的につながっていた<sup>(35)</sup>。天皇族にとって、和邇氏との姻戚関係は王権の強化と拡大に必要不可欠だったのである。

このように和邇氏は形成期のヤマト王権と血縁的に深く関わった氏族で、記紀編纂に先立つ大和朝廷内でも、その出自が海人族であることは知られていたのであろう。豊玉毘売がワニ（サメ）の姿で天孫族の子を出産したという奇怪な神話的フィクションには、和邇氏の存在が重ね合わされていたと考えることができる。日向からヤ

マトに入ってきた新参の天孫族が先住の和邇氏と姻戚関係を結んだことが、天孫族とワニ（サメ）の混血神話の背景になっていると言えよう。実際に大和朝廷は、九州南部の海域をも活動範囲としていた海人族の和邇氏の力を後ろ盾にして、隼人の勢力圏であった薩摩・大隅半島にまで版図を拡大することができたのである。

大和朝廷は九州南部の全域に七世紀後半に令制国として日向国を設置した後、七〇二年には日向国から薩摩国を分立し、さらに大隅半島を版図に組み入れるために、『古事記』完成の翌年七一三年には大隅国をも分立した。大和朝廷は大隅半島の全域を実質的に版図に組み入れるために、在地の豪族との同盟関係を結んでいった。志布志湾沿岸域の肝属平野きもつぎにおいては、大和朝廷は水田稲作によって勢力をなした大隅直おすみのあたとの同盟によって、半島南東部を統治下に置くことができた。その肝属平野は曾そ一族の支配領域でもあり、この一族は大和朝廷によって県主あかたなしとして認められていた。<sup>(57)</sup>それにもかかわらず曾於地域には、律令制によって班田収授を導入しようとする朝廷に対して執拗に抵抗する隼人の勢力が残存していた。前にも触れたように七二〇年には大隅国守が殺害される大隅隼人の反乱(58)が起こり、これに対して朝廷から大伴旅人が征隼人持節大將軍として派遣されて、反乱はようやく鎮圧されることになったのである。

このような大隅国における緊張した政治状況を背景にして、海と沿岸域を舞台にした日向神話が編纂されたのである。したがってそこには、大隅半島の曾於地域における隼人の存在が影を落としている。大和朝廷にとって、高千穂峰が大隅隼人の支配する曾於地域を攻略する北からの前線拠点であったとすると、南からの前線拠点は、大隅半島南東部の志布志湾沿岸から肝属平野へと入る肝属川流域であった。そこは、天照大神誕生の地である阿波岐原から日向灘を南下し、青島神社から鵜戸神宮を経て志布志湾から入り込めるルートになっていた。こうし

て大隅半島周辺の海とその沿岸域は、高千穂峰への天孫降臨から続くもう一つの、海を舞台にした日向神話になったのである。

## おわりに

以上、筑紫の日向にある高千穂峰に天降った邇邇芸命から火遠理命を経て鵜葺草葺不合命に至る「日向三代」の神話物語を見てきた。九州南部の広い意味での日向一帯を舞台にしていることから、その物語は「日向神話」と名付けられる。本稿を締めくくるにあたって、そうした日向神話の物語と構成を、地理的空間と時間の経緯との交点という視点からまとめることにしたい。

日向三代の神話物語は、地理的空間の視点から見ると、邇邇芸命が降臨した日向国の南端に位置する高千穂峰から始まり、邇邇芸命と山の神の娘である木花之佐久夜毘売とが出会って結婚した薩摩半島の阿多、その間に生まれたとされる火照命（海佐知比古）と火遠理命（山佐知比古）が確執し合う海の沿岸域、火遠理命と綿津見神の娘である豊玉毘売が出会って結婚した海の宮殿、そして鵜葺草葺不合命が生まれた海の沿岸域というように、物語の空間は山から海と沿岸域へと移動する。このようにこれらの物語の舞台は、九州南部の薩摩半島の山間部から大隅半島周辺の海とその沿岸部として特定することができる。

日向三代の神話物語を世代の時間経過という視点からみれば、邇邇芸命から火遠理命へ、火遠理命から鵜葺草葺不合命へという天孫族三世代の継承プロセスということになる。その天孫族の血縁継承は天孫族以外の血が混



ざってゆく混血のプロセスでもあること、そのことが記紀神話の中に生々しく語られていることに注目する必要がある。天照大神の直系の孫である邇邇芸命は、高天原から降臨して大山津見神の娘、すなわち木花之佐久夜毘売こと神阿多都比売と結婚し、生まれた三人の子どもは天孫族と山の神の血筋との混血である。しかも血を分けた兄弟であるはずの長男の火照命が、阿多隼人の祖であるという種明かしがされている。三男の火遠理命は天照大神の血を引く天孫族でありながら、阿多隼人の血も受け継いでいることになる。そして、その火遠理命と綿津見神の娘である豊玉毘売との子が鵜葺草葺不合命であり、したがってこの鵜葺草葺不合命は天孫族であるとともに、豊玉毘売から海の神の血を受け継いでいることになる。しかも父親の火遠理命から山の神の血をも受け継いでいるのであるから、この鵜葺草葺不合命は山の神と海の神の血筋を引くハイブリッド混血の世代ということになるのである。

日向三代の後に、鵜葺草葺不合命と綿津見神の娘で豊玉毘売の妹の玉依毘売の間に生まれた神倭伊波礼毘古命は、天照大神の五世孫として天孫族であるとともに、山の神と海の神の血筋を受け継いでいる。その神倭伊波礼毘古命は、日向から東遷して大和で初代天皇の神武天皇として即位する。こうしてその後の天皇族の系譜には、日向三代の混血のプロセスが受け継がれているということになる。したがって天皇族の系譜は天照大神の直系としての一元的な血統などではなく、むしろ多元的な混血によって成り立っていることを、記紀神話そのものが示している。記紀神話に示された婚姻関係による混血プロセスの物語は、天皇族の系譜の多元性によってその正統性を示そうという意図によるものでもある。したがってその正統性は、天照大神からつながる天孫族の純血性によるものではなく、むしろ九州南部における隼人族や海人族との交わりによってこそ証し立てられている。その



意味で日向神話の物語は、たんなる神話的フィクションではなく、こうした多元的で多様な交わりを反映したりアリティを帯びているのである。

しかしそこには、九州南部に対する大和朝廷の版図拡大という意図が見え隠れしている。記紀編纂に先立って、朝廷は列島全体に律令制の班田収授を拡大しつつあったものの、最後に残されたのが東北の蝦夷の地と九州南部の薩摩・大隅両半島の隼人の地であった。班田収授をこの地に及ぼそうとする朝廷の政策に抵抗したのが、土地共有を生活の基盤とする隼人である。とりわけ大隅隼人の反乱に対して、朝廷はその鎮圧に武力をもつてした。記紀神話の中でも最後に配された日向神話は、そうした大隅半島の緊迫した情勢を背景に編纂されたのであり、そこには大和朝廷の現在の視点が投影されているのである。

## 《注》

『古事記』からの引用については、中村啓信訳注『新版古事記』（角川文庫、平成二二年）により、引用箇所を（記一頁）というように、また『日本書紀』からの引用については、宇治谷孟訳『日本書紀』上・下（講談社学術文庫、一九八八年）により、引用箇所を上下の区別とともに（紀上一頁）というように付す。なお引用文については、筆者が変更した部分がある。

（1）『人文研究』神奈川大学人文学会、二〇六号、二〇二二年、五五―九〇頁。

（2）「日向」はもともと日向かうという意味からして、九州南部の中でも太陽の昇る東側を指すと考えられる。『古事記』で筑紫島の南部地域を広く指す「熊曾」（『日本書紀』では「熊襲」）が、最初の令制国名の「日向」として九州南部一帯を包括する国名となった。日向神話はそのような経緯から、九州南部とその周辺の海まで含めた物語によって成り立っている。

（3）梅原猛は『天皇家のふるさと』で「日向をゆく」（新潮文庫、平成一七年）で、日向神話が戦前において「国粹主義を助長」してきたことを

批判する一方で、津田左右吉のように「大和朝廷の支配を神聖化するために作られたフィクション」（二六九頁）だとする議論に対する疑念から、考古学的遺跡や伝承を踏まえて日向神話を検証している。

- (4) 熊野純彦は神代神話の中でも『古事記』を念頭に置いて、時間と場所の関係を次のように論じている。「時間のかたへと流れ去ったできごと、しかしいっぽう場所のうちにあかしを残し、痕跡を刻んでゆく」（『本居宣長』作品社、二〇一八年、七四七頁）。

- (5) 奥出雲が古代における鉄器製造の先進地であったことは、奥出雲を舞台にした須佐之男命による八俣大蛇退治の物語で、その体内から取り出された草薙剣によって象徴的に示されている。この点については前稿の六四頁を参照。

- (6) 伊邪那岐命が火之迦具土神の首を切った血から生まれたとされる雷と剣の神で、鹿島神宮の祭神である。後に、藤原不比等によって創祀された春日大社に鹿島神宮から勧請されることになる。

- (7) 熊曾国はその後の律令制によって、「熊」と表記された地域が「肥後国」南部地域の「球磨郡」となり、それ以外の広域が当初は令制国の「日向国」となった。そして後に日向国から「薩摩国」が、続いて「贈於」と呼ばれた地域を含む「大隅国」が分立することになる。

- (8) 明治一二年に行政区画として置かれた「贈於郡」の郡域は、現在の北は霧島市から曾於市を挟んで、南は志布志市や鹿屋市に及んでいて、もともとこの広域の曾於地域が元になっている。

- (9) 筑紫島の各『風土記』では「球磨贈於」と表記されるようになる。その間の事情については、中村明蔵『クマソの虚構と実像』丸山学芸図書、平成七年、三五頁以下を参照。なお、中村明蔵は「球磨と贈於との間には地形的・地理的にみても一体感がない」（『熊襲・隼人の社会史研究』名著出版、昭和六一年、一四九頁）うえに、文化的にも「異質なものがあ」としている。しかし球磨贈於はもともと熊襲に対応する九州南部の広域を表す名称で、両者の間の一体性は前提になっていない。

- (10) 『日本書紀』の景行天皇の条に、景行天皇が九州巡行において熊襲<sup>くまそ</sup>を討伐して襲<sup>くまそ</sup>の国を平定したものの、しかし再び叛いた熊襲に対して、第二皇子の小碓命<sup>やまとつけ</sup>すなわち日本武尊を遣わして討伐させたところ。

- (11) 「隼人」は「ハヤブサのような人」という意味で大和朝廷によって名付けられ、薩摩国と大隅国の先住民に共通する敏捷で勇猛な性格として一面では称揚された。

- (12) 「天孫」は直接的には天照大神の孫である邇邇芸命を指すが、邇邇芸命から始まる天照大神の子孫を総称して「天孫族」と呼ぶことにする。
- (13) ここに登場する高木神は、もともと高天原に最初に成った三神のうち天之御中主神に次ぐ二番目の高御産巢日神の別名である。その名前のとおり高木が神格化されたもので、縄文時代以来の樹木信仰の記憶を留めていると考えられる。この神はその後天照大神とともに天孫族に対する司令塔としての役割を果たすことになり、三番目の神産巢日神が出雲族に対する司令塔としての役割を果たすのと対である。
- (14) その名称は、『日本書紀』では天津彦火瓊瓊杵尊とされ、天忍穗耳命と高木神の娘である萬幡豊秋津師比売命の子とされる。
- (15) 「阿波岐原」は現在の宮崎市阿波岐原町に比定され、伊邪那岐命が禊をしたとされる「みそぎ池」が日向灘の沿岸近くに位置している。「阿波岐原」が伊邪那岐命の禊の場所選ばれたのは、この地が在地豪族の諸国君の日迎えの場所として、太陽神信仰と結び付けられたという歴史的背景が指摘されうる。この点については、中村明蔵「日向神話の成立をめぐる諸問題」「隼人族の生活と文化」隼人文化研究会編、雄山閣、一九九三年、四〇頁以下を参照。
- (16) 須佐之男命が天照大神との誓約に勝ったとして、高天原で「天照大神の作る田の畔を断ち切り、田に引く水路の溝を埋め」(記二七二頁) という乱暴狼藉を働いたという『古事記』の記述は、高天原が天照大神の水田稲作の場でもあったことを示している。
- (17) 記紀神話で、天岩屋に隠れた天照大神が再出現する場面では神憑りして踊るという巫女的性格を示し、邇邇芸命に随伴して日向に降臨する場面では、猿田毘古神に対して強い眼力で睨み勝ち強い性格の女性として描かれている。
- (18) 『日本書紀』一書(第二)には、天鈿女が猿田彦神に天孫の天降り先を問うたところ、「筑紫の日向の高千穂」(紀上六四頁)と答えたところからしても、高千穂峰を天孫降臨先に選んだのはこの猿田彦神ということになる。
- (19) 垂仁天皇(3世紀末から4世紀前半)の第四皇女で、『古事記』での表記は倭比売命。
- (20) 猿田毘古神を祭神とする猿田彦神社は、天照大神を祀る伊勢神宮内宮の近くに位置しており、猿田毘古神と天照大神の近い関係を示している。
- (21) 天宇受売命を始祖とする氏族で、大嘗祭など朝廷での祭祀を巫女として執り行った。稗田氏は猿女君の後裔で、太安万侶編纂による『古事記』の元になる伝承内容を誦習したとされる稗田阿礼は、その稗田氏の出である。賣太神社(奈良県大和郡山形市)は稗田阿礼を主祭神として

祀る。

- (22) 天兒屋命を祖神とする中臣氏の中でも、鎌足は大化の改新の功績により天智天皇から藤原氏を賜り、鎌足の子である藤原不比等は和和朝廷において大宝律令の制定や『日本書紀』の編纂にも参画している。また不比等の娘の宮子は文武天皇（草壁皇子の子）の妃として、後の聖武天皇の母となる。こうした藤原不比等の朝廷内での役割と天皇家との姻戚関係が、天孫降臨の場面における重要な役割の歴史的背景になっている。

- (23) 忌部氏の文書である『古語拾遺』によれば、布刀玉命は天御中主神の長男である高皇產靈神の子とされ、また天宇受売命は布刀玉命の娘とされている。

- (24) 三種の神器のうち、草薙剣は八咫大蛇を退治した須佐之男命から天照大神に献上されたもので、鉄器製造の先進地であった奥出雲に由来している。鏡はもともと中国に由来する銅鏡であるが、八咫鏡は天照大神を誘い出すために鍛冶が作ったとされていることから、国産の大型銅鏡と想定される。原田大六は伊都国の平原遺跡一号墓から発掘された大型内行花文鏡を、伊勢神宮の神体である八咫鏡と同型であるとしている（『実在した神話 発掘された「平原弥生古墳」 学生社、昭和四一年、一六六頁）。勾玉は縄文時代以来の宝玉で、その形態から生命の根源的霊力を秘めた物と信仰されてきた。鏡と鉄剣と勾玉の三点セットは、弥生時代の墳墓に広く副葬されたことから、三種の神器もまたそうした伝統に基づいたものである。「三種の神器」という言葉が定着したのは南北朝時代とする説もある（水野祐『日本神話を見直す』学生社、一九九六年、二三七頁を参照）。また明治期に制定された「皇室典範」では、天皇が崩御した時に「皇嗣」が「祖宗ノ神器」すなわち「鏡・剣・璽三種ノ神器」を継承すると規定されている。

- (25) その先頭に立ったとされるのが、武装した天忍日命（大伴氏の祖神）と天津久米命（久米氏の祖神）で、大和王権の近衛兵ともいうべき役割を担う軍事氏族、すなわち大伴氏と久米氏の存在がここで顕彰されていることになる。

- (26) 九州南部に水田稲作が導入された痕跡は、坂元遺跡（都城市）に見ることができる。この遺跡は、大淀川上流の支流をなす横市川流域にあつて、すでに弥生時代早期に北部九州から水田稲作が伝播した痕跡をとめている。

- (27) 西都原古墳群の中でも大型の前方後円墳である男狭穂塚古墳は邇邇芸命の陵、それに隣接する女狭穂塚古墳は木花之佐久夜比売の陵とする

伝承があり、そこに両古墳と記紀神話との関係が示されている。ただし考古学的には、男狭穂塚古墳の被葬者は諸県君牛諸井、女狭穂塚古墳の被葬者はその娘で、仁徳天皇の妃になった髪長比売と想定される。

(28) 檜古墳群の中でも、古墳時代初頭の前方後円墳（一号墳）の墳丘内から、纏向遺跡のホケノ山古墳と共通する国内最大級の本槨（棺を囲む木製の板柩）が発見されるなど、在地豪族と初期ヤマト王権とのつながりが想定される。

(29) 投馬国は、『魏志』倭人伝の記述によれば「南、投馬国に至る。水行で二〇日」とある。水行の起点を魏の帯方郡の使者が常駐する伊都国だとすると、そこから南方の日向に向けて海路で二〇日ということになる。またこれに続けて投馬国は戸数が「五万余戸ばかり」とあり、倭国の中でも邪馬臺国の七万戸につぐ九州南部最大規模の国として、弥生時代後期（三世紀前半）の日向地域に想定することができる。投馬国を宮崎県妻地方と比定する説については、足立倫行『倭人伝、古事記の正体』朝日新聞出版、二〇一二年、七七頁を参照。また榎一雄は、投馬国を「日向の沿海平野地方」で「古くから弥生式文化の及んでいる地域」として、『都萬（今の妻）の位置する一ツ瀬川流域』に想定し、「日向地方において古墳の分布の最も稠密なところ」として西都原古墳群を暗示している。『榎一雄著作集・第八巻・邪馬台国』及古書院、一九九二年、八七頁を参照。

(30) 津田左右吉は『日本古典の研究』において、「日向大隅薩摩の地方」を全体として「未開地、物資の供給も不十分で文化の発達もひどく後れていた」地として、中でも日向が「どうして皇室の発祥地であり得たか」と疑問を呈している（『津田左右吉全集』第一巻、岩波書店、昭和三八年、二七二頁）が、こうした議論には宮崎平野の弥生時代における水田稲作跡や前方後円墳を含む古墳時代の遺跡についての考古学的考察が欠けている。これに対して榎一雄は、記紀神話で「天孫降臨や皇祖の発祥が日向に結びつけられていること」の根拠として、「こう考えて納得のゆく程度の文化がこの方面に発達していた」としている。榎一雄の前掲書、八七―八八頁を参照。

(31) 『日本書紀』によれば、日向国の諸県君牛諸井の娘である髪長比売の美しさを聞きつけた応神天皇は、妃に迎えようとしたものの、比売を見初めた太子の大雀（命）（後の仁徳天皇）の願いを聞き入れて、太子に比売を譲ったとされる。この逸話には、諸県君とヤマト王権との同盟関係が示されている。中村明蔵による『隼人の古代史』吉川弘文館、二〇一九年、二二頁や『タマノの虚像と実像』丸山学芸図書、一九九五年、一一九頁以下を参照。

(32) 『日本書紀』の本文によれば、高皇產靈尊（たかみかみすみのみこと）によって高千穂峰に降ろされた瓊瓊杵尊は、そこから「瘦せた不毛の地を丘統きに歩いて、よい国を求めて」、「阿田国」の「笠狭崎」に着いたとされている（紀上五八頁）。このように高千穂峰は不毛の地で、瓊瓊杵尊は『古事記』の記述と異なっており、そこに宮殿を建てることもなく、早々に立ち去ったとされている。

(33) 野間岳は三角錐の形をしていることから、古代から神奈備山として信仰され、その八合目には邇邇芸命を主祭神とする野間神社が建つ。

(34) 木花之佐久夜毘売は、『日本書紀』でも「神吾田津姫」（かむあたつひめ）（紀上五八頁）とされ、薩摩半島の阿多（吾田）に出自があることが示されている。

阿多地域は律令制下で薩摩国の「阿多郡」として区分された。

(35) 「阿多隼人」は大和朝廷によって名付けられたもので、隼人の出自については従来の研究では必ずしも明らかにされてこなかった。「隼人」は「大隅隼人」も含めて日向国には登場することなく、倭（大和）人から区別されていることから、水田稲作文化以前の縄文系の先住民と想定される。九州南部の代表的な縄文遺跡である上野原遺跡をはじめ、薩摩半島南部の指宿にも橋牟礼川遺跡などの縄文遺跡が見られ、薩摩半島には縄文人が定住していたと考えられる。原口耕一郎は、「隼人」が空間的に九州南部の中でも日向国を除く「薩摩・大隅両国域の在地系住民に限られる」（『隼人と日本書紀』同成社、二〇一八年、四五頁）とする一方で、その民族的出自については問うことなく、「古代天皇制あるいは「律令国家」によって、上から一方的に創り出された存在である」（同四六頁）としている。

(36) 文武天皇の大宝二年（七〇二年）条に、薩摩と種子島が王化に服さなかったので征討して常駐の官人を置いたこと（『続日本紀』上、宇治谷孟現代語訳、講談社学術文庫、一九九二年、五二頁）、また薩摩隼人を征討する時に大宰府管内の神社に祈禱して賊を平定することができた（同五三頁）との記述が見られる。

(37) 「阿多」と呼ばれた地域は七〇四年の国印鑄造時に令制国の「薩麻国」とされ、したがって『古事記』が完成した七二二年に先立って、阿多の地は大和朝廷の統治下に入っていたことになる。その後八世紀半ば以降に「薩摩国」に改称され、「阿多隼人」も「薩摩隼人」に改称された。

(38) 本居宣長は「木花」の花について、『古事記傳』の中で「櫻花」と解釈している。『本居宣長全集 第十巻』筑摩書房、一九六八年、二一七頁。

- (39) 桜島は錦江湾の阿多カルデラの北に火山活動によってできた島で、記紀神話の編纂される前には薩摩半島と大隅半島の間に島として姿を現していた。その桜島には木花之佐久夜毘売が祀られていたことから、「咲耶島」と呼ばれていたとする説がある(『三国名勝図会』)。
- (40) 平安時代初期に富士山の延暦大噴火(八〇〇～八〇二年)と貞観大噴火(八六四～八六六年)があり、社伝によれば平城天皇の命により坂上田村麻呂が八〇六年に現在の地に浅間大社の社殿を造営したという。その大社の祭神は「浅間大神」とされていたが、江戸時代初期に木花之佐久夜毘売と結び付けられて富士山本宮浅間大社の祭神になったとされる。
- (41) 大和朝廷内で隼人は軍事防衛を司る兵部省の中でも隼人司に組み込まれ、薩摩国から移住してきた阿多隼人もまたその管理の下で、軍事や歌舞の訓練などを行った。
- (42) 飛鳥時代後期から導入された班田収授制は、班田収授法に基づいた律令制の根幹をなす土地制度で、農民は国家から支給された班田を耕作することにより収穫物の一定の割合を国家に収納し、死後には土地を国家に返納しなければならなかった。米の収穫量の少ないシラス台地の薩摩や大隅では、この制度は過酷なものとなった。この点については、井上辰雄『熊襲と隼人』教育社、一九七八年、二三六頁以下を参照。
- (43) 大和朝廷において左將軍の任にあった大伴旅人は、大隅隼人の反乱を鎮圧するために七二〇年に征隼人持節大將軍に任命され、反乱鎮圧に一定の成果をあげた。
- (44) 大隅隼人の民族的由来は、従来の研究では必ずしも明らかにされてこなかったが、朝廷の班田収授制に抵抗していることから、土地を共有する先住の縄文系住民と想定される。曾於地域には鳴神遺跡や桐木遺跡などの縄文遺跡が点在していることから、縄文系の先住民が水田稲作を受け入れることなく定住していたと考えられる。
- (45) 潮流と製塩を司る神。山佐知比古を綿津見神の宮殿へ導いたことから航海安全の神として祀られ、この神を主祭神とする総本社が陸奥国一の宮の鹽竈神社(宮城県塩竈市)である。
- (46) 綿津見神は、伊邪那岐命が黄泉国から戻って「筑紫の日向」の瀬の水で禊をしたときに成ったとされる、海を司る国つ神である。その誕生地からして、この神はもともと九州南部の海と結び付いている。
- (47) ここで大きな「ワニ」とされているのは爬虫類の鰐ではなく、海に生息する魚類のサメであると考えられる。山陰地方沿岸ではサメをワニ

と呼ぶ風習が現在でも遺っている。『古事記』のこの箇所原文出处ではワニが「和邇（邇）」（記四八七頁）と表記されており、もともと海人族の一派であった和邇氏のことが暗示されている。

- (48) 宮中での儀式で演じた隼人の風俗歌舞に、海水に溺れるような仕草も含まれていたとされる。『日本書紀』のこれに対応する箇所では、兄が「私を助けてくれたら、私の生む子の末代まで…俳優の民となろう」と言って、弟の前で潮に溺れるような滑稽な仕草をし、それから今に至るまで「その子孫の隼人たちはこの所作をやめることがない」（紀上八八頁、とされている。

- (49) 『日本書紀』の天武朝二年（六八二年）に、「大隅の隼人と阿多の隼人が朝廷で相撲をとり、大隅の隼人が勝った」（紀下二九一頁）とあり、大隅隼人と阿多隼人の一部とともに大和朝廷に仕えていたこと、また隼人に相撲文化があったことが分かる。

- (50) 鵜戸神宮は推古朝の創建と伝えられ、その本殿は宮崎県日南市の日向灘沿岸に面した岩窟の中に建ち、その周辺の荒々しい岩場から海の修験道の拠点ともされてきた。

- (51) 『日本書紀』では神日本磐余彦天皇と表記され、『古事記』の「倭」に対して「日本」の表記になっているのは、天武天皇によって対外的な国号とされた「日本」に従ったものである。

- (52) 対馬沿岸の海に面して建つ和多都美神社（対馬市豊玉町）の祭神は、天孫族の火遠理命と綿津見神の長女の豊玉姬命で、この神社にも綿津見神の系譜が伝えられる。

- (53) 宝賀寿男『和珥氏 古代氏族の研究』青垣出版、二〇一二年を参照。海人族の中でも博多湾を根拠地とする海部氏や安曇氏と並んで、和邇氏は九州から山陰の沿岸域を活動領域にしていたと想定される。

- (54) 大和における和邇氏の本拠地は大和国添上郡和邇で、その拠点は「櫟本古墳群」（奈良県天理市）に痕跡を留めている。この古墳群の中でも東大寺山古墳は四世紀半ば頃の和邇氏の首長の前方後円墳と想定されている。その副葬品の中の金象嵌大刀は二世紀後半に後漢で制作されたと推定され、海人族としての和邇氏による中国との交流関係を垣間見ることができるとされる。

- (55) 和珥（和邇）氏の祖は、第五代孝昭天皇の皇子・天足彦国押人命（紀上一一六頁）と伝えられる。この命の娘（押媛）は第六代孝安天皇の皇后となり、第七代孝靈天皇の母親とされる（紀上一一七頁）。また第九代開化天皇の妃（意祁都比売命）が丸邇（和邇）臣の血筋とされ、



また開化天皇の第三皇子の日子坐王ひこいますのみも母系で丸邇臣の血筋を引いているとされる（記三三三頁）。

- (56) 在地豪族の大隅直と大和朝廷との同盟関係は、志布志湾に注ぐ肝属川流域に造営された塚崎古墳群に含まれる前方後円墳の存在に示されている。大隅氏に与えられた姓かばねの「直」が、この氏族の朝廷への従属度の強さを示していることについては、前掲の中村明蔵『隼人の古代史』二二二頁を参照。

- (57) 在地豪族の曾一族が県主として大和朝廷によって任命され、「王権に従属した在地豪族」であったことは、篠川賢『国造——大和政権と地方豪族』中央公論新社、二〇二一年、七六頁を参照。大和朝廷が曾県主によって曾於地域を大隅国統治の足掛かりにしたことは、この地に前方後円墳を含む唐仁古墳群遺跡（鹿児島県肝属郡東串良町）にも示されている。この点については、井上辰雄『熊襲と隼人』教育社、一九七八年、六一頁を参照。

- (58) 中村明蔵は「隼人の反乱」に「曾君の勢力」が含まれていたことから、大和朝廷の律令制に対する抗戦が、比較的小規模であった薩摩隼人の抗戦と比べて大規模で長期化したと指摘している。前掲書『クマソの虚像と実像』一二九頁を参照。